

設立40周年に向け、更なる発展のために

会長 久保野雅史（神奈川大学外国語学部）

0. 全国事務局が関東に

今から1年前の2023年8月、立正大学附属立正中学校・高校（東京都大田区）で第34回全国大会が開催されました。コロナ禍のためにオンラインでの全国大会が続いたため、対面での開催は大阪樟蔭女子大学が会場となった2019年8月の第31回（30周年記念）大会以来、4年ぶりのことでした。

全国大会に合わせて開かれた会員総会で、関東支部から私が会長に選出されたことに伴って全国事務局も関東に移ることになり、それまで関東支部の事務局長だった今田健蔵理事（東京大学教育学部附属中等教育学校）が全国事務局長に就任し、実質的な前任者の吹原理事との引き継ぎも無事に完了しています。

1. 学会の存在感

本学会は1989年度に発足し2024年度で設立35周年を迎えます。これまでの会員・役員
の献身的な努力により、我が国の英語教育界で着実に地歩を固めて来ました。2024年度に
リニューアルされた英語教育協議会（ELEC）のホームページ（<https://www.elec.or.jp/>）
をご覧ください。HPを下にスクロールして行くと、100周年を迎えた語学教育研究
所、60年以上の歴史があるELEC同友会などの伝統ある団体と横並びで、本学会HPへのリ
ンクが掲載されています。英授研は今や、語学教育研究所やELEC同友会英語教育学会と肩
を並べる存在感を持つに至っているのです。設立から35年で本学会をここまで発展させて

きた会員・役員の皆さんに敬意を表し、代表としてこれまでの会長の氏名（敬称略）を掲載します。（ ）内の所属は会長就任時のものです。

- ・第1代（1989年度～） 隈部 直光（大妻女子大学）
- ・第2代（1993年度～） 樋口 忠彦（近畿大学）
- ・第3代（1997年度～） 行廣 泰三（聖心女子大学）
- ・第4代（2001年度～） 樋口 忠彦（近畿大学）
- ・第5代（2005年度～） 並松 善秋（関西外国語大学）
- ・第6代（2009年度～） 高橋 一幸（神奈川大学）
- ・第7代（2015年度～） 太田 洋（東京家政大学）
- ・第8代（2019年度～） 加賀田哲也（大阪教育大学）

2. コロナ禍での活動継続

加賀田前会長・吹原事務局の4年間（2019年8月～2023年8月）は、新型コロナウイルス感染拡大という逆境の中で、学会活動を停滞させずいかに継続していくかという闘いの日々だったと振り返ることができます。＜会長支部長 ML＞を活用して東西両支部で緊密な情報交換を行いながら、全国で足並みを揃えるべき部分と、各支部の状況に合わせた柔軟な対応を両立させることで活動を停滞させることなく、現在を迎えています。また、事務局業務の代行業者を変更するという大変な作業を行い、HPで会費納入も一元管理する現行システムの導入・稼働を実現しています。

このように波乱に富んだ4年間の活動を、記憶が風化しないうちに整理してみました。会員の皆さまの記憶にも、是非とも留めておいてください。

- 2019年度：年度末に新型コロナウイルス感染症が拡大、関東・関西支部の3月例会を中止
- 2020年度：活動をオンラインにシフト、両支部の春季研究大会を中止
 - ・第32回全国大会は開催中止、理事会はオンライン開催

- ・ 関東支部の例会は5月からオンラインで再開、関西支部の例会は7月からオンラインで再開（4～6月はHPに資料掲載）
 - ・ 事務局代行業務からの撤退をEDLが表明、2021年度より、SMOOSY（アトラス社）の導入を決定
- 2021年度：オンラインで活動を継続
- ・ SMOOSYにHPを移行。会費納入はオンライン決済が可能に
 - ・ 両支部の例会はオンラインで継続
 - ・ 第32回全国大会を、8/21土・22日に関西主管でオンライン開催
- 2022年度：オンラインと対面の併用
- ・ 両支部の例会は、秋以降に対面開催中心に
 - ・ 第33回全国大会を、8/11木(祝)・12金に関東主管でオンライン開催
- 2023年度：対面での活動が中心に
- ・ 第34回全国大会を、8/11土・12金に、立正大学附属立正中学校・高校で開催
理事会・懇親会も対面で開催

3. 40周年に向けて

英授研に私が入会したのは関東支部としては比較的早く、隈部会長の時代でした。その後、関西支部の例会や大会にも頻繁に参加するようになり、「実践から理論を構築していこう」という樋口会長（当時）の言葉に強く感銘を受けました。これは設立当時の英授研における共通認識のようなものだったように思います。この原点をもう一度顧みること。これが、本学会を他の学会・研究会と差別化し、更に発展させていくためには必要ではないかと考えています。

最後に、諸資料のデジタル化の進捗状況について報告とお願いです。紀要と全国大会発表資料集のデジタル化は完了しています。全国事務局にファイルを保管していますので、バックナンバーをご覧になりたい方はご連絡ください。デジタル化が完了していないのは「会報」

ですが、こちらもゴールが見えてきました。前理事の國方太司先生（大阪成蹊大学）が第1～38号のほぼ全てを寄贈して下さい、学会草創期の会報が一気に揃ったからです。今後発掘が必要なのは、2002年度以降に発行されたものの一部（※）のみとなりました。お手元に以下の会報（※）が残っている方は、是非とも久保野までお知らせ下さい。

（※ 28号、32号、47号、65号、69～71号、73号、75～76号）

関西支部 第34回 春季研究大会報告

日時 6月16日（日） 場所 大阪商業大学

■ビデオによる授業研究と協議会

◆中学校「中学校3年生：生徒が笑顔になる授業をめざす

— 現在完了進行形の導入において —

発表者：田中桜（兵庫県・三木市立緑が丘中学校）

分析者：加藤京子（愛徳学園高等学校）

発表者が「いつも全員が授業に参加できることを目指している」とおっしゃる通り、授業の導入に十分な時間をかけ、どの生徒も答えられる問いでインタラクティブなご実践でした。単元は、指導が特に難しいと言われている現在完了進行形。既習事項である現在完了形を思い出せるように、昨年も扱ったイラストを示し、「アハ体験」（少しずつ絵が変化）を通じて変わったところ・変わっていないところをゲーム感覚で見つけました。過去進行形、現在進行形で表し、現在完了進行形の概念をつかんだ後、自分自身がずっと続けていること（習い事や部活など）を書きます。

分析者は、発表者の生徒への接し方、場面や文脈が分かる導入、ゴールを見据えた活動設定、そして理解しづらいところには復習を入れていたことを賞賛されました。さらに良くするための改善点として、ペアワークの工夫、ライティングの前にはまとまりのある英語を聞かせることを提案されました。そして、ライティングでは、ずっと続けていること書くことに加え、その中で苦勞したエピソード等も入れるとさまざまな表現を扱えることもおっしゃっていました。そのようなエピソードも描かれると、友達の努力に共感したり、賞賛したりして、さらに笑顔が広がる授業風景となるに違いないと感じました。

北野梓（大阪府立富田林中学校・高等学校）

◆高等学校「英語コミュニケーションⅠ：インタラクションを中心にした授業」

発表者：宮崎貴弘（兵庫県・神戸市立葺合高等学校）

分析者：泉恵美子（関西学院大学）

「ときめく（spark job）ものが何かを考え、そこから人生の価値観を考えること」を自己表現させることを目標に授業は展開された。高校へ入学してわずか一ヶ月という短い期間にも関わらず、生徒たちが授業のスタイルや活動の意図をきちんと理解し、非常に前向きに取り組んでいた点が印象的であった。これらは、発表者の指導や授業の雰囲気にも理由があると感じる。

一つは、発表者が常にロールモデルとなって具体的な姿を示されていた点と優しくフォローする宮崎先生の姿が挙げられる。目標があるからこそ、生徒たちは活動の意図を汲み、その目標へ向かって練習することができていた。生徒が思うように言いたいことが言えない際には、発表者は自然と助け舟を出し、生徒はそのヒントを頼りに粘り強くがんばり続けることができていた。

授業の雰囲気も、理由の一つとした。リテリングの指導では内容の全体を確認した後に各自でどのようにリテリングするのかを考える時間があつた。友達同士で気軽に質問し合えるような雰囲気があつたり、発表中に詰まったとしても、生徒からは「先生が言い換えたりヒントを与えたりしてくれる」という安心感を感じた。この雰囲気も、生徒の頑張りを最大限に引き出してくれる理由であろう。

リプロダクションからリテリング、そして自己表現へと少しずつ正確性を高めていく指導は綿密に練られたもので大変素晴らしいものであつた。同時に、私にとって改めて授業の雰囲気づくりの大切さに気づかされた実践であつた。

大脇裕也（大阪府・大東市立北条中学校）

英語授業研究会関東支部第 27 回春季研究大会

日時 4月21日(日) 場所 文教大学東京あだちキャンパス

■ビデオによる授業研究と協議

◆中学校の部「笑顔で英語でのコミュニケーションを楽しむ生徒を育てるために」

授業者：土屋雅徳（川崎市立有馬中学校）

分析者：阿野幸一（文教大学）

昨今いくつかの地区や学校で広がりを見せる 5 ラウンドシステムを、年間というまとまりから、学期や数単元でという「有馬中 5 ラウンドシステム」を考案し、川崎市教育委員会の研究指定を受けた 2 年間の実践で生徒がここまで伸びて、座談会のテーマでもある「笑顔」になれるのかを存分に味わわせていただきました。今回は有馬中 5 ラウンドシステムの Round 4 で生徒（1 年生）はストーリーリテリングに取り組んでいました。綿密な指導と評価の計画も練られており、授業準備の大切を改めて学びました。また、この取り組みが土屋先生の個人の取り組みや研究ではなく、英語科として全員で関わっての研究である点が、当たり前のことのようでありながらなかなか難しい同一步調で行われていること、そしてそれがこの研究実践を結実させ、価値を高めていることを阿野先生からご指摘いただきました。全員が必ず授業公開を複数回行い、自身の伸びを実感されているのも注目すべき点です。リテリングのみならず、なりきりリーディングなど、生徒が楽しく英語を口にしようとする工夫もたくさん紹介され、とにかくその表情が印象的でした。

桐井誠（文教大学）

◆高等学校の部「論理・表現 I : AI を活用した新しい授業への挑戦

— 個別最適化の実現を目指して —

授業者：豊嶋正貴（文教大学附属中学校高等学校）

分析者：津久井貴之（群馬大学）

タイトルからも分かるように、時代の変化に合わせて新たなスタイルの授業を求め続けている発表者の探究心に学ぶ点が多い授業でした。特に AI 添削機能やオンライン機能、ワークシートの工夫においては先生方の質疑応答も活発でした。ICT の利点のみが強調されたわけではなく、授業中の使用や生徒が ICT を勉強道具として利用する際の留意点などにも言及され、教員も使いながら学ぶことの重要性を再認識させられました。分析者からは、機械や機器の利用に注目が行きがちな現状を踏まえ、あくまでも生徒がどう変容したのか、

生徒のどんな力が伸びて、さらに残された課題は何なのかという、授業研究の原点から軸足をずらすことなく、AI にできること、生身の教師にできることをしっかりと探っていこうというご指導が心に残りました。

松尾真太郎（筑波大学附属駒場中学校高等学校）

◆座談会「生徒の笑顔を引き出す授業とは？」でした。

コーディネーター：西村秀之（玉川大学）

発表者：中島利恵子（新島学園中学校高等学校）

中島真紀子（筑波大学附属中学校）

3名とフロアのやり取りを中心に進めるという新企画でした。英語科のみならず各教科の授業や学校そのものに求められるものが増えている中で、まずは教員に心の余裕がなければ「生徒の笑顔を引き出す授業」の実現は難しいものです。同時に、自分の信念も大切にしなければ、「教師の笑顔」も出てきません。しかし、「教師の笑顔」だけで「生徒の笑顔」がなければ授業とは言えません。

教師自身の中で、あるいは、教師と生徒の間で、時には、周辺教師や関係者との間でのせめぎあいがあるのは、むしろ試行錯誤している証拠ではないか・・・などなど、参加者すべてを巻き込んだ軽妙なやり取りで時間があっという間でした。明日の「生徒の笑顔」につながることでしょう。今年度も何か一つでも新しい試みに挑戦して自分の授業に変化をつけることができるように学びたいです。

桐井誠（文教大学）

<編集後記>

関東支部内での連携がうまく行かずに2024年1月発行分が発行できず、大変申し訳ありませんでした。今年度は、関東支部の松尾と桐井が担当させていただきます。

あっという間に全国大会（大阪）が終了しました。英語教育に寄せられる提言や施策要請は次から次へとやってきています。そのような中であっても、やはり、「授業」がその答えであり、私たち英語教育に関わる者のプライドでもあります。少しでも皆様のお役に立てる紙面を目指して参ります。今後ともよろしく願いいたします。

編集担当：桐井誠（文教大学）・松尾真太郎（筑波大学附属駒場中学校高等学校）

関東支部事務局